

## 第九 第4楽章「An die Freude」 翻訳ノート

2025.12月 中元悦治

### 1. はじめに

ベートーベン作曲 交響曲第9番第4楽章に用いられているF.Vシラーによる「An die Freude」の翻訳についての解説を始めるにあたり、先ず申し上げておくべきことは、シラーのこの詩は、ネイティブのドイツ人の文学者にとってさえも非常に難解なものであるということであり、さらに普通のドイツ人数人に訊いても「難しい。よくわからない」というのが一致した意見であったということである。「普通のドイツ人」とは言え、私が訊いたのは現役時代に仕事上で知遇を得た5人のドイツの弁護士の人達で、それなりに教養も深いいわゆる知的階層の人達である。私が「ドイツの人はこの詩を原文で読めて理解できるとはほんとに羨ましい」と言うと、中にドイツ音楽に造詣の深い人がいて、その人は「Überhaupt nicht! (そんなことはない!)」と即答であった。文法理解には当然障壁のないその人達でさえ「この詩は何を言ってるのかよくわからない」と異口同音に言っていたのが非常に印象的であった。

ましてや、ギリシア神話、キリスト教(旧約聖書)などのベース知識のない非ネイティブの我々日本人が翻訳するとなると、非常に難しいというより、無理であるというのが本意であるということ、先ずお知り置き頂きたい。

### 2. 今回中元が翻訳に至った経緯

今回の中元による翻訳であるが、BKO(バイエルンチューベ室内管弦楽団、以下「BKO」)で第九を演奏することに決まった昨年(2024年)10月頃からいろいろ昔を思い出して再研究していた。再研究というのは、50年以上前の学生時代に「第九のシラーの詩、研究会」というのを立ち上げて音楽好き数人とドイツ語の教授(この人はバッハの研究者でもあった)とでゼミを組んで、第九・シラーの詩を研究したことがあったからである。

1998年の市原フィルハーモニー管弦楽団での第九演奏会において私が翻訳したものをプログラムに載せたことがあり(正確にはプログラムに挟むという形であったが)、また2004年の弥生室内管弦楽団の第九演奏会でもプログラムに載せるという光栄に浴したが、これらにおける訳詞はその勉強会での産物である。

その後の自分自身の勉強・研究により解釈を変えた方がよいと気付いたり、語句をもう少し正確に訳出すべきと考えた箇所等が多々あり、それらを統合して、BKOでの第九演奏会に合わせて今回新訳を完成させたという次第である。

ただ私はドイツ文学の専門家でもなければドイツ語を専門に勉強した者でもない。また音楽を専門に修めた者でもなく、単なる一介の「音楽好き」というに過ぎない者である。それゆえ、この詩を研究すればするほど、「シラーの詩の翻訳など到底シロウトの手に負えるものではない」とずっと感じ続けていたのも偽らざるところである。

### 3. 中元による翻訳の解説

- (1) 今回、改めて翻訳について検討した際に、この詩の翻訳は何故難しいのかについて考えた。「語句そのものの意味の理解の難しさ」や「代名詞の解釈の難しさ」などがあるように思う。

「語句そのものの意味の理解の難しさ」については、そもそもシラーのこの詩は、逐語訳や対訳を読んだだけでは、日本語としてはわかって肝心の「何を言っているのか。文の前後がどう関係しているのか」等が全く理解できず、いわゆる腑に落ちないという感覚を覚えるというのが正直なところである。

また「代名詞の解釈の難しさ」としては、基本的な文法的事項は分かっても、「これを指している」と特定するのが極めて難しい箇所が何か所もある。前後の文意から選択せざるを得ないのであるが、これがまた難解で研究者の中でも解釈、訳出が割れるもとなっている。

今回の翻訳においては、これらの点を特に明らかにしたいと考えた。

- (2) この「翻訳ノート」の内容としては、前述の50年以上前の学生時代の研究会において作ったノートに今回新しい事項を加えてまとめ直したものである。

「新しい事項」とは、新しく気付いた文法的事項やそれに基づき新たに解釈し直した内容、更には自分なりの考察を加えた事項のほか、インターネットを通じて得た他の解釈や考え方などである。尤も、インターネット情報というのは、元来真偽が定かでないものや出所不明のものなど玉石混交であるのは承知の上であるが、それでも、話として面白いと感じた説は載せておくことにした。後日これらの情報が元になって自分の新たな見方が芽生えて来るかもしれない、捨てるには惜しいと考えたからである。インターネットにより得られた情報については、出典をすべて明記しているものではない。

あくまでも、この小文はきちんとした論文という類のものではなく、単なる中元の私的な「翻訳ノート」というものであるので、その点ご寛容頂きたい。

- (3) 以下、詩の各節ごとに、文法上の構造を明らかにしつつ、詩の中に現れる語句そのものの意味や代名詞についての自分の解釈を通じて、全体としてどう理解し、翻訳文を決めるにあたりどう整合性をつけていったかを解説する。ただ気になっている点があるので下記する。

- i. 「翻訳」という作業は、どこまで翻訳者の主観・解釈を訳文に入れていいものか、その判断、線引きは非常に難しい。今回も常に自問しながら翻訳したつもりである。とは言うものの今も心に引っ掛かっている点が2箇所ある。1箇所は、Wir betreten feuertrunken, での「feuertrunken」を「神々の火花の炎に酔いしれて」と「神々の火花の」という説明句を入れた点であり、もう1箇所は、und der Cherub steht vor Gott. での「steht」について「立つ」ではなく「立ちほだかる」という自分の解釈に基づいて踏み込んだ訳にした点である。これらについては、翻訳としては逸脱しているという批判があるかもしれないということは自覚しているが、あえてこのような訳出した。「文学作品の翻訳」ということの流儀を知らぬ者に対して、何かご教示頂ければ幸いである。
- ii. 今回の翻訳における自分の解釈、解説に関し、その是非、妥当性について専門家に確認する機会がなかったので、浅学ゆえの間違いや独善的なところもあるかもしれない。これも、中元の私的な「翻訳ノート」ということで免じて頂きたい。

- (4) 先ずは、2025.7月作成版(BKOの第九演奏会プログラムに載せたもの)の全訳を掲載する。以下の本文の解説はこの翻訳についてのものである。

ただし、この翻訳についても、今回の「まとめ作業」をしている中で翻訳間違いを見つけた箇所がある。本文解説中にてそれを指摘し、正しい翻訳を載せている。

尚、翻訳の底本としては、原詩が載っている権威のあるものを用いたかったが捜しきれなかった。そのため、当代きっての知ドイツ派文学者である小塩節氏がNHKドイツ語講座テキスト(昭和48年)に載せていたものを用いた。

O Freunde, nicht diese Töne!  
Sondern laßt uns angenehmere  
anstimmen, und freudvollere.

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium  
Wir betreten feuertrunken,  
Himmlische, dein Heiligtum!  
Deine Zauber binden wieder,  
was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,  
eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
mische seinen Jubel ein!  
Ja, wer auch nur eine Seele  
sein nennt auf dem Erdenrund!

Und wer's nie gekonnt, der stehle  
weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen  
an den Brüsten der Natur;  
alle Guten, alle Bösen  
folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
einen Freund, geprüft im Tod;  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
durch des Himmels prächt'gen Plan,  
laufet, Brüder, eure Bahn,  
freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen!  
diesen Kuß der ganzen Welt!  
Brüder, über'm Sternenzelt  
muß ein lieber Vater wohnen.  
Ihr stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such' ihn über'm Sternenzelt!  
Über Sternen muß er wohnen.

おお友よ、このような音楽ではないのだ！  
もっと快い、もっと喜びに満ちた調べを  
歌い始めようではないか

喜びよ、美しき神々の火花よ  
エリュシオン(永遠の楽土) から来た娘よ  
われらは神々の火花の炎に酔いしれて  
天なるものよ、汝の聖なる世界に足を踏み入れる  
汝の持つ魔力はこの世の慣習が厳しくも切り離れたもの  
を再び結び合わせ、また  
汝の柔らかき翼のもとで  
すべての人びとは兄弟となる

一人の友を真の友とするという  
大きな成功を収めた者に  
優しき妻を得ることのできた者は  
歓喜の叫びを共に上げてやるがよい!  
そうだ、地球上に存在する魂のうち、  
たった一つでもいいから自分のものであると  
そう主張できる者もまた歓声を呼応せよ!  
これらのどれ一つとして成しえなかった者よ  
涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい!

全ての生きとし生けるものは  
自然の乳房から歓喜を飲み  
全ての善人も全ての悪人も  
歓喜の薔薇の小径をたどって行く  
歓喜はわれわれに接吻と葡萄を与え  
さらに死の試練をもものともしない一人の友を与えた  
官能の悦びは虫けらにも与えられたが、一方  
神の御前には智天使ケルブが立ちはだかっている

嬉々として、太陽や恒星たちが  
天空の壮大華麗な軌道の間を飛翔するように  
兄弟たちよ、胸躍らせて汝の道を疾走せよ  
勝利に向かって突き進む英雄のごとくに

抱き合おう、幾百万の人びとよ!  
全世界の人びとと口づけを交わしあおう!  
兄弟たちよ、遙か星空の彼方には  
愛する父が必ず住み給うに違いない  
ひざまづいているか、幾百万の人びとよ?  
世界よ、汝は創造主の存在に気付いたか?  
星空の遙か彼方に主を尋ねてみるがいい!  
そこには必ずや主がおわしますに違いない

## 4. 各節ごとの解説

各節ごとに、或いは長い場合は前半・後半に分けて、先ず「■逐語解説」を提示する。

「逐語解説」とは、翻訳の根拠を記したものである。即ち、ある語或いは語句・詩句について「何故この翻訳・訳出したのか」という問いに対し、「これがその理由、拠り所である」という直接の回答の内容を示したものである。その中で、更に掘り進めた内容がある場合には「★論考」として記載することにした。さらには、節ごとに「◆その節のまとめ」として、俯瞰的な目で詩全体を眺めた時の当該節の持つ意味などについて記載した。

では、「レシタティーボ」から始めることにする。

### (1) レシタティーボ:

この3行は、シラーの詩「歓喜に寄す」にはなく、ベートーベン自らが書いたものである。

O Freunde, nicht diese Töne!	おお友よ、このような音楽ではないのだ！
Sondern laßt uns angenehmere	もっと快い、もっと喜びに満ちた調べを
anstimmen, und freudenvollere.	歌い始めようではないか

### ■ 逐語解説

#### ① Freunde : 「友よ」

Freund (友人)の複数形 Freunde が用いられているので、正確には「子どもよ」と訳出すべきかもしれないが、ここは単なる呼びかけであるので「友よ」が良いと思う。

#### ② Töne! : 「音楽」

Ton の複数形である Töne が用いられているので、「音」ではなく「音楽」と訳すべきである。「このような音」と訳しているものを多々目にするが正確ではない。

#### ③ nicht diese Töne! については、「このような音楽ではなく・・・」と文が続いているように訳す例も多いが(大木正純(音楽評論家)訳(NHK趣味講座「第九をうたおう」テキストなど)、Töneのあとで「!」で切られて一文が完結していることから、「このような音楽ではないのだ!」と言い切るべきであろう。

また、ここで用いられているのは diese という指示代名詞であり、solche ではないので「このような」と訳すのは正確ではなく、本来的には「これらの」である。ただ「これらの音楽」と訳すと日本語として不自然感があるので「このような音楽」と訳出することにした。

では、「これらの音楽」とは、どのような音楽を言おうとしているのだろうか。

diese(「これらの」英語では these)は「手元にあるものを指す指示代名詞」であるから、「自分(ベートーベン)が手を伸ばせばすぐに手に入るような身近な巷にあふれているもろもろの音楽」を意味しているのだろうか。有力な説として、第1楽章から第3楽章の音楽を指すというのがあるが、第1楽章から第3楽章のような素晴らしい音楽をベートーベン自身が「このような音楽ではない」と本気で否定するなど到底考えられない。これは、表面的、形式的に、或いは演技として、恰も「第1楽章から第3楽章の音楽」を指すように見せかけて、その実は「巷のくだらない音楽ども」を指していると考えるのが妥当ではないだろうか。

#### ④ laßt uns : 「～しよう」

lass uns は英語の Let's に当たるが、「子ども」という複数の相手に対して「～しよう」と言うのであるから(即ち ihr に対する命令形) laßt uns となっている。因みに、単数の相手に対するとき(即ち du に対する命令形)は lass uns である。

#### ⑤ angenehmere 及び freudenvollere : 「もっと快い」、「もっと喜びに満ちた」調べ。

いずれも形容詞の比較級であり、そのあとに省略されている語は Töne(調べ)である。

比較級であるので、2つの形容詞それぞれに「もっと」という語をつけるのが良いと思う。

ただ、比較する相手が明確には示されていないので、何に対して「もっと」なのか漠然としてしまうのではないかという危惧はあるが、「もっと」という日本語には「比較を示す」というのと同時に「強調する」という効果が生じるので、ここでは「もっと」を付けるのが良いと思う。

ここで省略されている Töne という語については「調べ」と訳出した。前段の nicht diese Töne! では Töne を「音楽」と訳したが、その意味するところは nicht diese Töne! のところで述べたとおりであるが、一方「もっと快い、もっと喜びに満ちた Töne」というのは、これから歌い始めようではないかと語りかけているように、音楽の中でも特に「歌」という意味合いが強いのではないか。そこで、単に「音楽」と訳すのではなく、「歌・旋律」という意味を意識した「調べ」という訳にした。

⑥ anstimmen : 「歌い始める」

単に「歌おう」のように訳したものも多いが、anstimmen は第一義的には「歌い始める」である。独英辞書では「to strike up(演奏を始める)」と英訳されているものが多い。「ein Lied anstimmen」を「to strike up a song」と訳す用例も多く載っている。

★ 論考

O Freunde, nicht diese Töne!	おお友よ、このような音楽ではないのだ！
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere.	もっと快い、もっと喜びに満ちた調べを 歌い始めようではないか

この3行について、上記のように訳出したが、以下のようにすべきなのではないかと思始めている。

「おお友よ、このような音楽ではないのだ！  
もっと快い調べを歌い始めようではないか。  
そうだ、もっと喜びに満ちた調べをだ。」

・理由

1. 語句の並び順から見ると、先ず「もっと快い調べを歌い始めよう」という文が来て一旦カンマで区切り、その後「,und」として「もっと喜びに満ちた」と形容詞を言い加えているという形になっていることに注目すべきである。もとの訳ではこの語順に込められた意味が表現できていない。
2. 即ち、「『もっと快い調べを』と先ずは言ってみたものの、これでは不十分だ。自分が本当に言いたいのは『もっと喜びに満ちた調べを』ということなのだ。」とベートーベンと言いたい故に、この語順にしたのではないだろうか。  
「,und」は「そして」というただ単なる繋ぎの語ではなく、「いや待てよ、そうだ!」と自ら考え直して念を押すように言い直すという意味が込められているのではないか。
3. この箇所の音楽を見てみると、満を持して登場したバリトン独唱が O Freunde, nicht diese Töne と声高らかに一気に歌い、音楽が静かに流れるのを背景にして、Sondern laßt uns angenehmere と静かに語り始める。しかし、このくだりが終ると、オーケストラの f の音で何か気付かされたかのように、また声を張り上げて und freudenvollere と高音でやや長い時間をかけて噛みしめるようにフェルマータを挟んで、或いはアトリブで独唱者の思いを加えてもよいとし、低い音で歌い収めている。
4. 以上から、ベートーベンが、und freudenvollere (もっと喜びに満ちた)をより強く伝えたいのであろうと考えられ、その意図を汲んだ翻訳にすべきではないかと思うに至った。ただ、世の中の翻訳では、このように訳したものは寡聞にして見たことはない。

## (2) 第1節 前半

この第1節は、シラーの原詩でも第1節であり、冒頭をなしている。

Freude, schöner Götterfunken,	喜びよ、美しき神々の火花よ
Tochter aus Elysium	エリュシオン(永遠の楽土) から来た娘よ
Wir betreten feuertrunken,	われらは神々の火花の炎に酔いしれて
Himmlische, dein Heiligtum!	天なるものよ、汝の聖なる世界に足を踏み入れる

### ■ 逐語解説

#### ① Freude :「喜び」、 schöner Götterfunken :「美しい神々の火花」、 Tochter :「娘」

これらの訳語としてはいずれも辞書のとおりでよいであろう。schöner は、schön(美しい)という形容詞が男性名詞である Götterfunken を付加修飾しているので schöner と語尾変化しているのであって比較級ではない。

funken には「閃光」という意味もあるが、殊更「鋭い光」ととる必要はなく普通に「火花」で良いと思う。それぞれ名詞を並べているだけであるので「～よ」という呼びかけにした。

小塩節(中央大学教授 ドイツ文学者『NHK 基礎ドイツ語講座』講師)は次の様に述べている。

「『火花』という言葉は日本語ではきらりときらめく、しかし小さな、はかない火の粉ですが、ドイツ語では非常に力強い火の一部と考えられています。神の本質が火花となって人間の中にとびこんで精神になる。これはドイツ神秘哲学からフィヒテにいたる思想です。そういった歴史的伝統を踏まえたうえで、シラーは「輝かしいもの」の意味で、この語を用いています。」

#### ★ 論考

Freude (喜び、歡喜)、Götterfunken (神々の火花)、Tochter (娘)は並列されているので、「Götterfunken」「Tochter」はいずれも「Freude」を言い換えた比喩と理解すべきであろう。比喩ではあるが、その関連性は何であろうか。

やはり「歡喜」が通底する感情であろうか。この詩において「歡喜」というものは、ギリシア神話で称えられている神々の火花やエリュシオンから来た娘に匹敵するというのである。ギリシア神話に登場するあまたの神々が放つ神々しい火花というのは神話の中の人間にとってはそれ自体輝かしい「歡喜」をもたらしてくれるものであろうし、またエリュシオンというのは英雄のみが死後に住むことが許される理想郷である。そこから来た娘というのは「歡喜」を持って迎えらるる対象とされるということであろう。この冒頭を見る限りでは、この詩は先ずギリシア神話から説き起こそうとしていることが伺われる。

因みに、ベートーベン第4楽章の最後の締めくくりにこの3語を繰返し用いている。

#### ② aus Elysium : 「エリュシオン(永遠の楽土)から来た」

単に「樂園」と訳しているものも多いが、ここでは旧約聖書にあるアダムとイヴの「樂園」ではない。なぜなら「Götter」という「Gott(神)」の複数形が使われていることから、キリスト教的な一神教ではなく多神教の世界と捉えるべきだからである。多神教の世界というと先ずギリシア神話を想起するが、まさしく Elysium はギリシア神話の樂園 Elysion (ラテン語では Elysium)という語から来ている。ギリシア神話での「エリュシオン」とは「神々に愛された人々(英雄など)が死後そこで幸せな生活を送った場所」という意味である。ホメロスのオデュッセイアには「エリュシオンの野」が「永遠の理想郷」を意味する語として登場している。

翻訳では、上述の内容を書き入れる訳にはいかないのが、「エリュシオン」の語をそのまま

ま用い、(永遠の楽土)とカッコ書きにして訳出した。これでもギリシア神話に通じていない読者には何のことやら伝わらないと思うが致し方ない。

③ betreten : 「～に足を踏み入れる」 目的語に4格をとる他動詞であるので、betreten dein Heiligtum で「汝の神聖な場所に足を踏み入れる」となる。

④ feuertrunken : 「神々の火花の炎に酔いしれて」という副詞句に訳出した。

翻訳にかなり難渋する箇所である。この語は Feuer (火) と trunken (酔った) を合わせたシラーの造語と言われている。

今回の翻訳では、「炎」について「神々の火花の」という説明句を付け加えた。あくまでも中元の解釈に基づくものであるので、翻訳の基本を逸脱していると言われればそうかもしれないが、以下の理由により、あえてこのようにしてみた。

1. 単に「炎に酔いしれて」とする訳も多い(例:小塩節「火に酔いしれて」)が、これだと「炎」という語が突然現れたという唐突感が否めない。そこで、この「炎」の出所を探すと、「火」という語が出てくるのは前段の Götterfunken である。feuertrunken はこれを受けてシラーがわざわざ作った言葉と捉えれば、やはり「神々の火花の」を付け加えて訳すべきではないかと考えるに至った。即ち「火」というのは唐突に現れたのではなく、「歓喜」イコール「神々の火花」の「火」を踏まえて、「その炎に酔いしれて」と捉えた。さらに単に酒に酔うだけではなく、気持も高揚し陶醉するというニュアンスも含めて、「酔う」ではなく「酔いしれて」という訳出した。
2. 1行目の Götterfunken と3行目の feuertrunken は韻を踏んでおり、そのことからしても両者が「火」という語により通底しているとして翻訳に活かすべきではないだろうか。
3. 「火のように酔いしれて」と訳したのも多く目にするが、「酔い方」として「火のように酔う」とは日本語として普通は言わないし意味も不明である。
4. 「酔う」というのを「酒に酔う」とは採らず、「火の粉を浴びて気持が陶醉していく」と捉えて「われらは炎に陶醉し」とした翻訳もある。頷ける翻訳ではあるが、trunken は「飲んだ」というのが第一義であるのでやはりそれは活かすべきであろう。更には「火に焼かれて」と意識するものもあるが、これは本意から逸脱しているであろう。
5. 佐々木庸一(音楽学者・ドイツ文学者)は「はげしく酔って」として「大いに感激して」の意であると説明している(「ドイツ・リート名詩百選」)。さらに大木正純(音楽評論家)は「情熱に満ち」(NHK 趣味講座「第九をうたおうテキスト」)、曾我大介(指揮者)は「燃える胸を躍らせながら」(「第九虎の巻」)と訳している。このように著名な専門家においても「trunken」の第一義的な意味を翻訳に反映させず意識しているというのは feuertrunken の翻訳の難しさを示すものであろうが、それにしても、やはりこの trunken という語のニュアンスは反映させるべきなのではないだろうか。

⑤ Himmlische : 「天なるものよ」分かりやすく言うと「天にいる者よ」と呼びかける語とした。

himmlisch は、本来は「天上の」「崇高な」という形容詞であるので、Heiligtum 「神聖な場所」に掛かる形容詞と捉えて「天上の神聖な場所」や「崇高な神聖な場所」と訳しているものも多くあるが、それは「, Himmlische , dein Heiligtum」という語順及び「,」(カンマ)の打たれ方からするとありえない(※Himmlische の語の前にあるカンマについては、そのように打たれていないテキストも少数ながら見かけるが、語の後ろのカンマはほぼ例外なく打たれている)。もし「神聖な場所」にかかる「天上の」という形容詞とするなら、語順は dein himmlisches Heiligtum となるべきものである。文法的には他動詞 betreten は4格の目的語をとるので形容詞 himmlische も Heiligtum(中性名詞)を修飾する4格語尾変化をして himmlisches となり、Wir betreten dein himmlisches Heiligtum となる。

一方、Himmlische 自体に「神」「天使」という名詞とする辞書(博友社 木村・相良)もあり、さらに殆どの原詩のテキストでは Himmlische という語が前後を「,」(カンマ)で区切られており、しかも頭の文字が大文字であることから名詞と捉えて、独立した「天なるものよ」と呼びかける語とするのが最も適切であると考えた。

⑥ dein Heiligtum (汝の神聖なる場所)の「dein」は何を指すか?

普通には「君の」という意味の所有冠詞 dein の 4 格。(betreten は 4 格の目的語をとりさらに次に来る Heiligtum が中性名詞であるので dein も 4 格となっている。)

★ 論考

1. これは後半冒頭の Deine Zauber(汝の魔力)や dein sanfter Flügel (汝の柔らかい翼)の Deine や dein と同じものを指すと考えて間違いないが「汝の」と訳するにしても、「汝」とはそもそも一体誰のことかという疑問が生じる。Himmlische のところで述べたように「天なるもの」であろう。中元の翻訳では、dein は「汝の」で通している。第 1 節後半の Deine Zauber や dein sanfter Flügel の dein も同じであることからすると、やはり内包する意味としては「天上の神」と考えるのが妥当なところであろうか。
2. もっと大きな見方をして、「dein(汝)」=「歓喜」と捉えてはどうだろうか。翻訳上は「歓喜」と訳出するのは無理な感じであるが、裏の隠された意味としては考え得るのではないだろうか。この第 1 節は、シラーの原詩においても第 1 節であり、「Freude 歓喜」という語がその冒頭を飾っている。これは、この詩が「歓喜」が一大テーマであることを先ず宣言していると捉えて良いであろう。そして、前述のように、Götterfunken (神々の火花)、Tochter (娘)は Freude (喜び、歓喜)を言い換えた比喻であるとする、  
「dein(汝)」は、大きな意味として「歓喜」と捉えることも可能ではないか。  
第 1 節後半において、「汝の持つ魔力は、この世の慣習が厳しくも切り離れたものを再び結び合わせ、また汝の柔らかき翼のもとですべての人びとは兄弟となる」と語っているが、この「汝」イコール「歓喜」と捉えれば、「『歓喜』の魔力は人間が作った慣習などを乗り越え、『歓喜』の翼の留まる場所では(即ち『歓喜』に覆われる場所では)温かく包まれて人間はみな仲良く兄弟となる。」のように話として理解しやすくなる。

(3) 第 1 節 後半

Deine Zauber binden wieder,	汝の持つ魔力はこの世の慣習が厳しくも切り離れたもの
was die Mode streng geteilt;	を再び結び合わせ、また
Alle Menschen werden Brüder,	汝の柔らかき翼のもとで
wo dein sanfter Flügel weilt.	すべての人びとは兄弟となる

■ 逐語解説

- ① Deine Zauber binden wieder : 「汝の持つ魔力は(was 以下を)再び結び合わせ」  
Zauber(魔力)は、単数複数同形であるが、Deine 及び binden となっているので複数形であることが分かる。単数なら Dein Zauber bindet となる。複数にしているのは「汝」は一種類だけでなく多くのいろんな魔力を持っているという意味合いであろう。
- ② was die Mode streng geteilt : 「この世の慣習が厳しくも切り離れたものを」  
普通の文に書き直すと、was die Mode hat streng geteilt であり、hat が省略されている。「hat+過去分詞(geteiltはteilenの過去分詞)」の現在完了形の構文である。teilenは「分ける」という他動詞。現在完了なので、正確には「切り離してしまった」とでも訳すべきかもしれないが、「切り離した」という訳出で十分であろう。

「Mode」は、普通は「流行、はやり」という意味である。広義に捉えて「社会的人間関係」や「社会上の身分階級などの慣習的なもの」（佐々木庸一）とする訳もある。全てを包含する概念として「慣習」と訳出した。

小塩節(前出)は次の様に述べて、「階級制度」という捉え方をしている。

「(Mode 即ち)この世の時流がきびしくへだててしまったもの、というのは社会的人間関係です。階級制度とも申せましょう。階級が違えば、結婚も出来ない、そんな古い因襲にとらわれている後進国ドイツの社会をシラーは鋭く見つめています。」

- ③ Alle Menschen werden Brüder : 「すべての人びとは兄弟となる」

Brüder はここでは複数形であり、「兄弟」という一般的概念を表しているので無冠詞。

- ④ wo dein sanfter Flügel weilt : 「汝の柔らかき翼のもとで」と訳出した。

この詩句は非常に意味が取りにくい。この詩の最大の難所である。50年前の研究ゼミにおいても結論は出ず、とりあえず「汝の柔らかき翼に抱かれ」と訳すことにした。市原フィルの時も弥生室内管の時もプログラムにはこのゼミの訳を載せた。

weilt は weilen の 3 人称単数現在形であり「とどまっている、滞在する」の意味であるので、直訳すると「汝の柔らかい翼(dein sanfter Flügel)が留まっている場所で(wo) 」となる。wo は場所を示す関係副詞で「~のところで」の意。

## ★ 論考

1. 「汝の柔らかい翼が留まる」とは、一体どういう意味なのだろうか？

これが非常に難しい。「翼が留まる」というのが日本語として意味がとれない。

前出の佐々木庸一は「おんみのやさしい翼がとどまるところで」(前出)と訳し、「Freude を天使に例えその翼が休んでいるところではみな兄弟となるのだと言っている」と説明としているが(同注)、「歓喜のあるところではみな兄弟となる」という意味だろうか。また同じく前出の大木正純は「なんじのやさしい翼がとどまるところ」と訳しているが説明はない。平野昭(ベートーベン研究家)も「あなたの優しい翼が憩うところで」としか訳していない。その他著名な研究者も押しなべて直訳そのままであり解説もしていない。巷で目にする翻訳も語句をなぞっただけの直訳の「汝の柔らかい翼が留まっているところで」というものが多い。

2. 中元の解釈

「汝」については、前述では「内包する意味としては「天上の神」と考えるのが妥当なところであろうか」と書いたが、「天上の神」に固執すると wo dein sanfter Flügel weilt. の意味が全く分からなくなってしまう。

そこで、訳出としては「汝」とせざるを得ないが、真に隠された意味は「歓喜」であると捉えるのである。こうすると理解がしやすい。即ち、「『歓喜』の魔力はこの世の慣習が厳しくも切り離れたものを再び結び合わせ、『歓喜』の柔らかい翼の留まるところでは温かく包まれて人間はみな仲良く兄弟となる。」となる。wo dein sanfter Flügel weilt. は、分かりやすく言うと「『歓喜』という柔らかい翼が存在するところでは、つまりこの翼に覆われ抱かれ、その翼の内側にある柔らかな羽根に包まれているところでは」とでもなるであろう。そういう歓喜の温かさに満たされたところでは「すべての人びとは兄弟となる」と言うのである。

3. 第九のメインテーマを合唱が高らかに歌いあげる最初のクライマックス(543-590 小節)では、Freude, schöner Götterfunken, から始まるこの第 1 節を歌わせており、さらに Deine Zauber からの後半部を繰り返させている。ベートーベンも余程この節の詩句に思いを込め

たかったのであろう。また、第4楽章の終わり近くでは、Alle Menschen werden Brüder, wo dein sanfter Flügel weilt. を美しくソロ4重唱で歌わせている。

◆ 第1節まとめ

- ① 第1節では、冒頭に「歓喜」を置いて、この詩は「歓喜」が一大テーマであることをまず宣言している。そしてこの節では「歓喜」についての理念を述べている。

「歓喜」というものは、ギリシア神話で称えられている神々の火花やエリュシオンから来た娘に例えられるほどのものである。酒に酔ったときのような身も心も奪われる陶酔感を持って歓喜が存在する聖なる世界に足を踏み入れれば、歓喜の魔力は人間が作った慣習などものともせず、そこではその柔らかい温かさに包まれ全ての人々は兄弟になるというのである。

この節では、「歓喜」の持つ崇高な偉大さを先ず謳っている。

- ② シラーの原詩では、この第1節に続いてすぐに以下の4行が置かれている。

Seid umschlungen, Millionen!      抱き合おう、幾百万の人びとよ!  
diesen Kuß der ganzen Welt!      全世界の人びとと口づけを交わしあおう!  
Brüder, über'm Sternenzelt      兄弟たちよ、遙か星空の彼方には  
muß ein lieber Vater wohnen.      愛する父が必ず住み給うに違いない

ベートーベンの第九では、この4行は後半部に置かれているものである。

ベートーベンが、原詩を離れて独自のストーリーを持つ世界を創り出そうとしていることが、早々とこの第1節にして伺われる。

(4) 第2節 前半

Wem der große Wurf gelungen, eines Freundes Freund zu sein, Wer ein holdes Weib errungen, mische seinen Jubel ein!	一人の友を真の友とするという大きな成功を収めた者に  優しき妻を得ることのできた者は 歓喜の叫びを共に上げてやるがよい!
---	---

■ 逐語解説

- ① Wem der große Wurf gelungen, における Wem について

以下に詳説するようにこの箇所の中元の翻訳は間違っていて、次のように訂正する。

「一人の友を真の友とするという大きな成功を収めた者によ、  
優しき妻を得ることのできた者ほよ、  
歓喜の叫びを共に上げてやるがよい!— 歓喜の叫びを共に上げよ!

- ・ Wem は、「～の者に」と目的語として訳するのは間違いである。gelingen(gelungen の原形) という動詞は「物」を主語としてとるという構文上「者」を表す関係代名詞が3格として入るので文法上 wem となっているだけである。例文: Der Plan ist ihm gelungen. 「その計画は彼にとってうまくいった。」

したがって、次に出てくる Wer(者)とは並列・並置となり、「大きな成功を収めた者」となる。「大きな成功を収めた者に」という目的語ではない。今回の翻訳はこの間違いを犯している。

- ② Wem der große Wurf gelungen : 「大きな成功を収めた者」  
eines Freundes Freund zu sein : 「一人の友を真の友とするという」

- ・ 普通の文に書き直すと、der große Wurf ist wem gelungen であり、「ist+過去分詞」で現在完了形の ist が省略された構文である。Wurf は「投擲・投げること」というのが本来の意味であるが、「(サイコロを)投げること」から転じて「賭け」という意味がある。gelingen の原形は

gelingen であるが、基本は「(物事が) うまくいく」という意味である。よって直訳すると「大きな賭けがうまくいった者」さらに「大きな賭け(に勝つという幸運)が当たった者」となる。「大きな成功を収めた者」と訳出した。

- ・ どういう成功かということ、eines Freundes Freund zu sein 「一人の友の友になる」という成功である。eines Freundes は Freund にかかる 2 格。zu sein は英語の to be と同じで、eines Freundes Freund zu sein は Wurf を説明する zu 不定詞の形容詞的用法である。

「一人の友の友になる」というのもよくわからない表現であるが、次節後半に「歓喜はわれわれにさらに死の試練をもものともしない一人の友(einen Freund, geprüft im Tod)を与えた」というくだりがあることから、「一人の親友を得る」と解釈した。「親友」という表現ではなく「一人の友を真の友とする」と訳出した。

- ③ Wer ein holdes Weib errungen, : 「優しき妻を得ることができた者」

Wer hat ein holdes Weib errungen の hat が省略された「hat+過去分詞」の現在完了構文。holdes は hold(優しい)という形容詞が Weib という女性名詞にかかるので語尾変化したものの。Weib は「女性・妻」、errungen の原形は erringen 「獲得する」。

- ④ mische seinen Jubel ein! : 「自分達の歓喜の叫びを共に上げよ!」

einmischen は「混ぜ合わせる」の意の分離動詞。einmische という語尾の形から du を想定した命令形を取っているものと考えられる(※主語 du の時の平叙文での einmischst において命令文にする際に st をとって e をつけるという文法規則により einmische という形になっている)。du という単数 2 人称を想定した命令形にしているのは、「友を得た者」「妻を得たもの」それぞれの者に対しての命令を意識しているのであろう。直訳すると「歓喜の叫びを混ぜ合わせよ!」。Jubel は「歓喜の叫び」。seinen は「彼の」という所有代名詞であり、上記の二つの「者」それぞれを指しているので「自分達の歓喜の叫びを混ぜ合わせよ!」ということになる。ただ、「自分達の歓喜の叫びを共に上げよ!」とすると日本語として不自然感がある(俗にいう「座りが悪い」)ので、「自分達の」は訳出せずとも「共に」があれば十分意味は通じると考え「歓喜の叫びを共に上げよ!」とした。

#### ★ 論考

第九の約 20 年前に作曲された歌劇「フィデリオ」では、その最後のクライマックスでは妻レオノーレを称えて "Wer ein solches Weib errungen, Stimm'in unsern Jubel ein!" (このような妻を得た者は、われらの歓呼の声に唱和せよ) と熱唱されるが、このくだりはシラーの詩をほぼそのまま引用しており、ベートーベンは早くからこのフレーズに着目し共感していたことが伺える。

#### (5) 第 2 節 後半

Ja, wer auch nur eine Seele sein nennt auf dem Erdenrund!	そうだ、地球上に存在する魂のうち、 たった一つでもいいから自分のものであると そう主張できる者もまた歓声を呼応せよ!
Und wer's nie gekonnt, der stehe weinend sich aus diesem Bund!	これらのどれ一つとして成しえなかった者よ 涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい!

#### ■ 逐語解説

- ① wer auch nur eine Seele sein nennt auf dem Erdenrund :

「地球上に存在する魂のうち、たった一つでもいいから自分のものであるとそう主張できる者もまた歓声を呼応せよ!

- wer は関係代名詞の1格で「～する者」の意。
- nur eine Seele は、英語でいうと only one Soul(たった一つの魂)である。
- sein は「自分の物」の意。 Das Buch ist sein. 「その本は彼のだ。」というのと同じ使い方。
- nennt は原形は nennen(呼ぶ, ~と言う)であるが、この動詞は「SVOC」の形をとり「SはOをCと呼ぶ」となる。文の構造としては、 wer(S) nennt(V) Seele(O) sein(C) であり、直訳すると「werは魂を自分の物と呼ぶ」となる。werは関係代名詞であるので「魂を自分の物と呼ぶ者」となる。
- auf dem Erdenrund 「地球上における」であり、Seeleを修飾していて、「地球上におけるたった一つの魂」となる。
- ここで auch の解釈が難しい。

ここで、auch をどういう意味に解釈するかによってこの第2節の解釈に影響を与えかねない。

- i. 「auch nur eine Seele」を一塊と捉え、それを強調する「～でさえ」(英語の even)という副詞とする解釈。「たった一つの魂でさえ」と「一つ」を強調する意図である。

全体を訳すと、

「そうだ、地球上に存在する魂のうち  
 たった一つの魂でさえ自分のものであると言う者」

こなれた日本語にすると

「そうだ、地球上に存在する魂のうち、  
 たった一つでもいいから自分のものであると主張する者」

となる。

- ii. 「auch」を「～もまた」「～も同様に」(英語の too)という副詞と捉え、文全体に関するものとする解釈

前節の2つの関係代名詞と並列することを明確に意図するものである。

全体を訳すと、

「そうだ、地球上に存在する魂のうち  
 たった一つの魂を自分のものであると言う者もまた同様だ!」

となる。

- iii. 上記 i, ii の両方を兼ねているというやや曖昧さを許容する解釈

全体の翻訳としては、

「そうだ、地球上に存在する魂のうち  
 たった一つの魂でさえもを自分のものであると言う者もまた同様だ!」

となる。

巷で目にする多くの翻訳はあまり厳密には考えず、この iii の解釈をしている。

中元の翻訳もこの iii に従っている。

- この行は「～する者」という止め方がされているので「そうだ。～する者もだ!」と打ち切った訳も良いと思う。中元は「もまた歓声を呼応せよ」ともう一度繰り返す形に訳出したが、原詩の順どおり「友を得た者よ、妻を得た者よ、歓声を呼応せよ! そうだ、魂を主張できる者もだ!」という訳もよいと思う。
- 「地球上におけるたった一つの魂」を「遠く離れた心の通い合う人」を指すとする説がある(檜山哲彦、ヒルデブラント)。

② wer's nie gekonnt : 「それを成しえなかった者」

wer's = wer es であり、現在完了の「hat」が省略されており wer es hat nie gekonnt となる。gekonnt は、話法の助動詞 können(～できる)が本動詞として単独で使われている形である。

★ 論考

- ・全体の意味としては、「それをできなかつた者」となるが、この es(4格「それを」)という代名詞は具体的には何を表しているのだろうか。かなりの難問である。

前半を含めて簡潔にまとめると、

「友を得た者、妻を得た者は歓声を呼応せよ。そうだ、魂の所有を主張できる者もだ!

そして、それを成しえなかつた者は立ち去れ!」

という構図になる。

ここで「それを成しえなかつた」の「それ」とは何を指しているのだろうか。

考え方1: 「友を得ること」「妻を得ること」「魂の所有を主張できること」の3つの全てをまとめたものを指すという考え方。

即ち、「3つとも出来なかつた者のみ立ち去れ」という考え方

考え方2: 「魂の所有を主張できること」のみを指すという考え方

即ち、「友を得、また妻を得ることはできても魂の所有を主張できなかつた者は立ち去れ」という考え方。

「Ja そうだ!」と言い直しているのは、「魂の所有を主張できること」による歓喜は「友を得ること」や「妻を得ること」による歓喜も包含する上位の概念を指しているという考えに基づくものである。「地球上に存在する魂のうち、たった一つでさえ自分のものであると主張できること」の重要性に全てが集約されていると考えるのも一案だと思ふ。

上述の auch の解釈での「ii」を採用すると、この考え方2は出てこない。

考え方3: 「友を得ること」、「妻を得ること」、「魂の所有を主張できること」のうち1つだけを指すという考え方。

即ち、「3つのうち1つでも出来なかつた者は立ち去れ。3つすべてを出来た者のみ団結の輪に残れ」という厳しい主張に通じる考え方

・中元の解釈

考え方1が妥当と思う。この考え方なら3つのうちどれか1つが出来れば団結の輪に留まることができる訳で、1つでも出来たということは歓声をあげることができたということになり、「歓喜」というテーマの重要性を広く捉えるということに合致する。「歓喜を分かち合えなかつた者(即ち3つとも出来なかつた者)のみ、この団結の輪から去れ」という意味になり説得力はある。

③ der stehle weinend sich aus diesem Bund! :

「涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい!」

- ・ wer es hat nie gekonnt, der stehle weinend sich aus diesem Bund!

この文は文法的には難しい。der は、定関係代名詞(～の者は)で wer を受けている。即ち、「der=wer es hat nie gekonnt (それをできなかつた者)」である。更に、stehle は、stehlen が接続法 I 式の要求話法により語尾変化したものである(※主語が3人称単数においては stehlen は stehle となる)。der を主語とする要求話法であるので der に対する軽い命令にな

る。直訳すると、「それをできなかった者は、その者は泣きながら団結の輪からそっと出ていけ!」となる。要求話法という軽い命令であることから、次の様に訳出した。

「これらのどれ一つとして成しえなかった者よ

涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい!」

- ・ sich stehlen は「そっと出ていく」というニュアンスになる。
- ・ weinen は「泣く」であるが、大声で泣く(schreien)のではなく「涙を流す」というニュアンスである。weinend は weinen の現在分詞の副詞的用法で「泣きながら」となる。
- ・ Bund: 「団結の輪」と訳出した。

「集い」「集まり」や「仲間」という訳も見受けられるが、もう少し大きな概念であろう。シラーはフリーメイソンの会員ではなかったが、フリーメイソンを意識しているのではないかという理由から「同盟」と訳すむきもあるが、ここまで大きくとらえると違和感がある。規模の大きさととらわれない訳語として「団結の輪」とした。

或いは、原詩は、当時ドイツで新しく流行していた「集いの歌(Gesellschaftslied)」のスタイルをとっているが、これは酒場などで仲間たちが皆で歌ったものである。ここでの「Bund」は案外「オレたちの仲間に入れてやらないよ」という程度の軽い意味なのかもしれない。

#### ★ 論考

1. この第2節の最後の「これらのどれ一つとして成しえなかった者よ、涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい!」という箇所であるが、この箇所は「厳しい排除の論理」であるとして、作品が成立した頃から批判されてきたところである。一方「排除の論理」ではなく、団結の輪への単なる「もっと穏やかな加入条件」を示しているに過ぎないとする説もある。或いは、上述のようにさらに軽い意味かも知れない。
2. ベートーベン、合唱パートに der stehle からディミヌエンドさせ、weinend で *p* に落とさせているが、そうすることにより「涙を流してそっと立ち去る」様子を表現しているのであろうか。また wer's nie gekonnt の nie(英語の not)に *sf* をつけ、「成し得なかった」という文言を強調している。

#### ◆ 第2節まとめ

第1節において「歓喜」の持つ崇高な偉大さを述べたが、第2節では、人間界における「歓喜」の獲得条件を述べている。

「かけがえのない親友を得ること」、「優しい妻を得ること」、「地球上の魂の1つでよいからその所有を主張できること」の3つである。これらの3つとも成し得なかった者は、歓喜に対する欠格者として歓喜の輪には入ることはできない。やはり「排除の論理」かもしれない。

#### (6) 第3節 前半

Freude trinken alle Wesen	全ての生きとし生けるものは
an den Brüsten der Natur;	自然の乳房から歓喜を飲み
alle Guten, alle Bösen	全ての善人も全ての悪人も
folgen ihrer Rosenspur.	歓喜の薔薇の小径をたどって行く

#### ■ 逐語解説

##### ① Wesen : 「生き物」

Wesen には、「実在、本質」という意味があるが、ここでは「生物」の意味でとらえればよいであろう。alle Wesen で「すべての生き物」「全ての生きとし生けるもの」。

② an den Brüsten der Natur : 「自然の乳房から」

Natur(自然)は女性名詞であるので die Natur であるが、「自然の」という 2 格は der Natur となる。ドイツ語では英語と違い、所有の 2 格は後ろから前の名詞を修飾するというのが原則であるので Brüsten を後ろから修飾して「自然の乳房」となる。

den Brüsten は、die Brust(乳房)の複数形 die Brüste の 3 格である。ここでは前置詞 an(英語の on 又は at)は、後ろに 3 格の名詞を伴っているので「位置・場所」を示す意味になり、「～にて」という訳語になる。自然な日本語として「自然の乳房から」と訳出した。

③ alle Guten, alle Bösen : 「全ての善人も全ての悪人も」

Guten, Bösen は形容詞の名詞的用法で、複数形にして「その性質を持った人々」を表している。よって、「良い人たち」、「悪い人たち」となる。

④ folgen ihrer Rosenspur : 「(歓喜の)薔薇の小径をたどって行く」

folgen は、3 格の目的語を伴って「(名詞の 3 格)をたどっていく」。

★ 論考

1. ihrer Rosenspur の ihrer は「歓喜の」又は「自然の」のどちらの意味であろうか。

これは意見・解釈が分かれている箇所であり、専門家或いは巷で目にする翻訳においても、Freude とするものと Natur とするものの 2 つの説が拮抗している。

この ihrer は、文法的には単数の女性名詞又は 3 人称複数名詞を表す所有冠詞とよばれるもので、分かりやすく言うと「彼女の」又は「彼ら・彼女らの」という意味である。即ち、この代名詞が指しているものは「単数の女性名詞のもの」又は「複数名詞のもの」となる。ここでこの節に現れる単数の女性名詞を探すと Freude と Natur が見付き、複数名詞を探すと Brüsten が見つかる。ただし、第 3 節後半の最初の文の sie も同じものを受けているので複数名詞は当たらない(解説: 文法的に Küsse gab sie の gab は geben の 3 人称単数過去形であるから、sie は 3 人称単数となり複数を目指すものではない。よって複数名詞である Brüsten は外れる)。となるとこの ihrer が表しているのは女性名詞である Freude か Natur のどちらかとなる。

では、Freude 又は Natur のどちらとすべきであろうか。

i. 「Freude」とする説

Freude は「歓喜」と訳されるので、ihrer Rosenspur は「歓喜の薔薇の小径」となる。更に Küsse gab sie uns und Reben の sie も同じく「歓喜」ということになるので、「歓喜はわれわれに接吻と葡萄を与え」となる。

ii. 「Natur」とする説

Natur は「自然」と訳されるので、この場合、「自然の薔薇の小径」及び「自然はわれわれに接吻と葡萄を与え」となる。

2. 「歓喜の」又は「自然の」のどちらが妥当か。

どちらも文法的にはおかしくはない。両説が拮抗しているのも頷ける。

ただ私は、以下の理由から「歓喜」説を採用する。

i. 原詩第 3 節の冒頭が Freude から始めていることから伺えるように、この詩のテーマは「歓喜」が大きな意味を持っていると考えられること。

ii. ベートーベンが第九では採用していない原詩第 4 節(下記)において「歓喜」が主題であることが高らかに謳われている。即ち、世界を巨大なゼンマイ時計に見立てて、その動力であるゼンマイ= 歓喜が宇宙・自然全体をつかさどっていることを謳うという内容である。

Freude heißt die starke Feder  
In der ewigen Natur.

歓喜は力強いゼンマイだ  
永遠の自然の中において

Freude, Freude treibt die Räder	歓喜よ、歓喜こそが齒車を回す
In der großen Weltenuhr.	巨大な世界時計において
Blumen lockt sie aus Keimen,	歓喜は花々をつぼみから誘い出し
Sonnen aus dem Firmament,	恒星たちを天空から誘い
Sphären rollt sie in den Räumen,	歓喜は天体を宇宙で回転させる
Die des Sehers Rohr nicht kennt.	天文学者の望遠鏡でも見えないところで

このことから見ても、第3節も「歓喜」が主題であると考えるのが相当ではないだろうか。

3. ihrer Rosenspur=「歓喜の薔薇の小径」と訳出したが、具体的にはどういう小径を指すのであろうか。以下のような諸説がある。

i)「薔薇の足跡」とは「歓喜の通った足跡」のことだという説、ii)「薔薇の香りが漂う小径」という意味に採り「幼くして吸った歓びの残り香を手懸りにして成長してゆく」という意味であるという説、iii)同じく「薔薇の香り」と採り「すべてが薔薇の香りに満ちたその香跡」とする説、iv)「喜びの女神が薔薇の花を撒き散らしながら歩いたあとにできる小径」という説などである。また、v)キリスト教と関連付けて、薔薇には刺があることから『薔薇の跡 (Rosenspur)』というのには十字架上のイエスの脇腹の『傷 (Spur)』である『聖痕』を指すと捉え、「自然のばらの跡をたどる」は「イエスの胸の傷に従う」ことであるという説(森善虎(声楽家))まで存在している。

カルロス・シュヴァーベ(1866 - 1926)の絵画『エリュシオンの野』では、豎琴を手にした一人の女性が一面に薔薇が咲き乱れている野に立つ姿が描かれていることからすると、単純に「薔薇の花が咲き誇っている小径」という意味でよいのではないか。もっと深読みして「薔薇は人生における小さな歓びを表しており、人間はそれを追い求めつつ生きてゆくものなのだ」という説もある。

#### (7) 第3節 後半

Küsse gab sie uns und Reben,	歓喜はわれわれに接吻と葡萄を与え
einen Freund, geprüft im Tod;	さらに死の試練をもものともしない一人の友を与えた
Wollust ward dem Wurm gegeben,	官能の悦びは虫けらにも与えられたが、一方
und der Cherub steht vor Gott.	神の御前には智天使ケルブが立ちほだかっている

#### ■ 逐語解説

① Küsse gab sie uns und Reben : 「歓喜はわれわれに接吻と葡萄を与え」

Küsse は、Kuß(接吻)の複数形。Reben は、Rebe(葡萄)の複数形。「葡萄酒」と訳しているものが非常に多いが、「葡萄酒」のドイツ語は Wein であるので正確には Reben は「葡萄酒」ではない。ただ意味的には「葡萄酒」の方が近いと思われるので良しとしよう。

gab が geben(与える)の3人称単数過去形であるから、sie は3人称単数である。これは前節の ihrer と同じものを指している。

#### ★ 論考

「接吻することで歓喜を感じ、葡萄酒を飲んで歓喜を感じる」というのが普通の言い方であるが、ここでは「歓喜」に焦点を当てて主体に見立て「歓喜が我々に接吻と葡萄を与えた」という表現になっていると考えられる。

一説として、接吻は「愛」の表現であり、葡萄酒は、キリストが最後の晩餐で葡萄酒を「私の血です、飲みなさい」と述べたことから「血=生命」と捉えて、「歓喜はわれわれに愛と生命を与えた」と解釈する説がある(森善虎(声楽家))。

② einen Freund, geprüft im Tod : 「死の試練をもものとしなない一人の友」

きちんと書くと、sie gab uns einen Freund, geprüft im Tod となる。

- geprüft im Tod : 直訳すると「死の中で試練を受けた」「死の試練を乗り越えた」

prüft は prüfen の過去分詞で副詞的用法で「試験を経た」「(試験の結果)信用を得た」という意味である。im Tod が付加されているので「死の中で試練を受けた」「死の試練を乗り越えた」となる。そして einen Freund, geprüft im Tod で「死に対しても怯まないような真の友情があるのか否か試され、そして認められた、そういう友」という意味になる。「生死を共にする」という訳出も可能であろう。太宰治の『走れメロス』は、シラーの詩「人質」を下敷にしたものらしいが、その中でのメロスとセリヌンティウスの友情のイメージか。「死の試練をもものとしなない一人の友」とはキリストを指しているとする説(小松長正(指揮者))もある。

③ Wollust ward dem Wurm gegeben, und der Cherub steht vor Gott.

直訳すると「肉欲は虫に与えられ、そしてケルブは神の前に立つ」となるが、木に竹を接ぐようで何とも意味がよくわからない。この一文は非常に難解であり、解釈は百花繚乱というか、ケルブが出てくる意味が全く違う観点で捉えられている。前2行にある「われわれ人間、接吻、葡萄、友、虫、肉欲」と「ケルブ、神」の関係をどう理解するかが難解で解釈が割れる所以である。諸説、或いは勝手と思われる解釈など多数存在するが、中元は以下のように解釈する。先ずは逐語解説をする。

- Wollust ward dem Wurm gegeben, 直訳すると「肉欲は虫に与えられた」

Wollust は「肉欲・性的快楽」、ward は werden の過去形の文語表現で雅語や詩的な文体において単数主語に対して用いられる(普通は wurde)。werden gegeben で受動態を作っている。Wurm は英語の worm と同語源で「虫」の意。その前に dem が付いているので3格で「虫に」。直訳すると「肉欲は虫に与えられた」となる。シラーが同時期に書いた戯曲『たくらみと恋』での登場人物の悪代官の名前「ヴルム」としても使用していることから、Wurm を「単なる虫」ではなく「青虫、ミミズ、蛆虫などの虫のみならず人間より下位の忌み嫌うようなものの象徴」とする考え方もある。

- und der Cherub steht vor Gott. 直訳すると「そしてケルブは神の前に立つ」

der Cherub 「ケルブ」は、九位階あるとされる天使の階級の中で熾天使セラピムに次ぐ第二の地位をもつ智天使「ケルビム」の単数形。旧約聖書の『エゼキエル書』によると「4つの顔と4つの翼を持ち翼の下に人の手のようなものがある」という醜悪な姿として描かれており、「天使」という羽根を持つ清らかな子供のイメージとは程遠い。

Got 「神」(単数)は、無冠詞で使われているので一神教の神を表している。

この詩では、この箇所ですら唐突に「ケルブ」が出てくる。「神々の火花」、「エリュシオン」というギリシア神話の世界で始まったこの詩が、ここで突如として「ケルブ」と無冠詞単数の「神」というキリスト教世界が現れる。これが読者に困乱をもたらしている要因の一つであろう。

★ 論考

1. 「der Cherub steht vor Gott」の中元の解釈

私はこの der Cherub steht vor Gott を、単に「神の御前に智天使ケルブが立つ」ではなく「神の御前には智天使ケルブが立ちほだかっている」と踏み込んだ訳にした。「神の御前にはケルブがいるためエデンの園には容易には近づけない」と解釈し、この解釈を表すべく「神の御前には智天使ケルブが立ちほだかっている」という訳出にした。

巷の翻訳は殆どが「立つ」となっていて翻訳者の解釈を説明するような訳出は少ない。しかし、ここを単に「立つ」とのみ訳すからその前のくだりとの関係、続きが曖昧になり、その結果「意味が分からない」ということになってしまう。解釈としては諸説存在しているのに訳文は多くが「立つ」としている。ある解釈を採用ならそれを表現できるような訳出をすることこそ翻訳の肝ではないかと思うのだが、如何であろうか。

ただ、steht の一語のみで「立ちほだかる」という訳を付けるのは行き過ぎという思いは強く抵抗感はある。通説となる解釈がない現状において、ここまで一翻訳者の解釈を表出して良いものなのか、翻訳の節度は保たれているのかという思いは今も消えてはいない。

## 2. 中元の解釈について以下に詳説する。

### i. 先ず「und」という語の存在である。

これまでは「,」や「;」を使って話を展開しているが最終行において初めて「und」という語を用いている。これは、大きな場面転換を示唆するものであり、読者に意識転換を求めているものである。具体的に言えば、「これまでは人間・虫という地上界での話であったが、今度は天上界に目を移す」と場面転換しているのである。

これを表現するために、und を「一方」と訳出した。

### ii. 次に、この行では「Steht 立つ」という語を現在形にしていることである。

地上界の場面では人間や虫には「与えられた」という過去形にして決着済みとしたが、しかし一方天上界に目を移すと、神の御前にはケルブが立っているという「現在も厳然として存在している状態であること」を強調した言い方にしている。

### iii. 上記 i, ii より次の結論が導かれる。

地上界においては、人間には接吻、葡萄、友(かけがえのない大切なものの象徴か)という歓喜が与えられ、虫には性的快楽が与えられ、それぞれ喜びが与えられたが、一方天上界に目を移すとそうは行かない。天上界では「神はアダムとイヴを追放した後、エデンの園の東に恐ろしい形相のケルビムと廻る炎の剣を置いて生命の木への道を守らせた」となっている(旧約聖書『創世記』第3章)。そのケルブが立ちほだかっているために人間は「エデンの園」に入ることはできず、神の存在を実感することはできないのである。

ではこの天上界での現実を見たとき、我々人間が神の存在に迫るにはどうすればよいのか。

その答えが第5節にあるのではないか。第5節では次のように語っている。

「幾百万の人びとよ! 抱き合おう、全世界の人びとと口づけを交わしあおう、そうすれば、愛する父は遙か星空の彼方にいるにちがいない。また、ひざまづけば、創造主の存在に気付き、星空の遙か彼方に必ずや主の存在を予感するにちがいない。」

幾百万の人びとが、抱き合い、全世界の人びとと口づけを交わしあうこと、そしてひざまづくという畏怖の念、これこそが我々人間が神の存在を実感するための唯一の手段であるということをこの詩は訴えたいのだと思う。

### iv. ベートーベンの音楽の上からもこの解釈が裏付けられるのではないだろうか。

ベートーベンがCherubに *f*(311小節)や *sf*(319小節)をつけて強調しているのは、この箇所を「地上では我々人間に歓喜が与えられや虫にも官能の悦びが与えられたが、天上の神の前には門を守る天使ケルブが立っているので簡単にはたどり着けない」と捉えてCherub を強調する意図を示しているのではないか。そして、このあとで vor Gott が繰り返されるのは、「神のところへは行けないので憧れを込めて呼び叫んでいる」という気持を表現しているのではないだろうか。

さらには、合唱が *ff* で「Gott」と伸ばしている間、弦と Fg, CFg がユニゾンで激しい下降音型を二回も奏しているが(326, 328 小節)、これは、神を呼び叫べども叶えられず気持は沈みうなだれていく様子を表しているのではないか。ロマン・ロランは「光にひれ伏す民衆を表現している」と説明しているという指摘もある(神崎正英)。

そして最後は「神様の調性」と言われている二長調(正確には二長調の属音である階名ソ(音名 A))で輝かしく終わらせるのではなく低弦と Fg, CFg, Hr3, 4 番, Tim に F の音を出させて、実のところは変口長調のドミナントを鳴らせている(上記 F(階名ソ)と他の楽器の A により(階名シ))。これは二長調による Gott という叫びが叶えられないことを暗示していて、想いを果たせないまま天上への道を求めて、今度は正式に変口長調にてマーチが鳴り、新たな旅が始まるという構成にしたのではないだろうか。

### 3. 参考までに、他の翻訳及び解釈をいくつか要約して紹介する。

#### ① 「ケルビムが立ちはだかっているので神に近づけない」とする説 中元の解釈に比較的近い説である。

##### ◇ 神崎正英(音楽評論家)

『快樂は虫けらに与えられ、

そしてケルブが立っているのだ、神の前には』

##### ・ 神崎は、次のように説明している。

「前段の「自然(歡喜)はキスと葡萄酒と、死の試練を経た友人を与えた」は、純粹に与えられるもの(キスと葡萄酒)と、簡単には手に入らないもの(死の試練を経た友人)という対比の関係があると言える。これと同様に、セミコロンでつながれる言い換えとしての後段は、「誰にでも与えられる快樂と、畏怖すべき神の世界」という対比が提示されている。「快樂は虫けらにも」と対比して考えると、“天上の世界は、強面の守護天使が立っている、単純な喜びではなく畏怖をとまなうもの”である。」

「地上での幸せは(虫けらも含め万人に)与えられるが、天上の神の前には門を守る天使ケルブが立っており、神の喜びを感じながらもそう簡単にはたどり着けない。だが何とかしてそこに行きたいという強い願望がこの 2 行には表現されているのではないか。」

##### ◇ 山岸健一(音楽評論家)

『肉の快樂は虫けらに与えられた。

しかし、ケルブが立ちはだかっているのだ、神の前には!』

##### ・ 山岸は、以下のように説明している。

##### i. Wollust(肉欲)

「人間に相応しくない肉欲は虫けらに与えられた」と、人間と虫けらに格差があるという解釈をすべきと考えるが、単純に「肉欲は下等だから、下等な虫けらに」というのではないと思う。ケルビムが立ちはだかっているため、人は「エデンの園」に再び入ることはできない。そこは、『創世記』では、本来は肉欲が罪・恥とされない世界だった。それを覆したのがアダムとイヴの罪だ。肉欲は「下等生物の虫けらに相応しい」のではなく、「(虫けらでさえ与えてもらえるのに)、アダムとイヴの罪のために人間には与えてもらえないものだ」

##### ii. 「旧約聖書『創世記』第3章によると、神はアダムとイヴを追放した後、命の木への道を守らせるため、エデンの園の東にケルビムを置いたという。「天上の国の入口をケルビムが守っている」という設定を踏まえると、der Cherub steht vor Gott は、「ケ

ルブが神の前にいるため簡単には近づけない」と解釈すべきだろう。人は、肉欲も与えられず、神にも近づけないのだ。」

## ② ケルビムにも歓喜が与えられたと採る説

ケルビムの存在については、上記①とは全く異なる解釈である。

人間には、歓喜により愛(接吻)や生きる糧(葡萄、かけがえのない友)が与えられ、虫けらには種の保存のためという最低限の悦楽は与えられた。しかしケルビムには神の御前に立つというこの上ない光栄、喜びが与えられたという解釈である。

### ◇ 檜山哲彦(東京藝術大学名誉教授・ドイツ文学)

『虫には愉楽を与えた

そして、智天使ケルビムは神のみ前に立つ』

・檜山は、次のように説明している。

「これはおそらく、喜びの跡を正しくたどって成長した結果こうなった、というわけでしょう。喜びによって、人間には、友愛の口づけ、喜びと同じく酔いをもたらすワイン、真実の友が与えられ、小さな虫には、虫にふさわしい命の愉しみが与えられた。それを確認した今---アクセントのある und には十分な意味がこもっています---天使ケルビムは天上の神のみ前に立つのです。自らの仕事の成就を報告するかのよう、おそらくは胸を張って。」

### ◇ 佐々木博康(大分大学)

以下のように説明している。

「この第3節全体のテーマと構成を考慮して「虫けらにも人間と同じく喜びが与えられる」とする。そもそも第3節は、「すべての生き物は喜びを飲む」という大前提から始まる。生命のもっとも根本的な原理はこれだと宣言している。

そして、まず人間(善人と悪人の区別なく)が求める「喜び」、つまり愛と葡萄酒と友による喜びについて語られ、次いで最下等の生き物の代表として「虫けら」が選ばれ、その「快楽」について、つまり本能の充足による「喜び」について語られる。そして最後に人間を超える上位の存在を代表して天使ケルビムの喜びについて語られる。

天使の喜びとは何か? それは「神の前に立つ」という喜びだ。「神の前に立つ」ということは、神を見ることができるということだ。

キリスト教では、『神曲』のダンテのような例外はあるが生きている人間は神を見ることができないとされている。天国に入ることを許された者だけに与えられる報償だ。神を直に見ることは「至福直観」と言われ、究極の幸福とされている。ケルビムは天上で神を見るという栄に浴している。それが天使の「喜び」なのだ。」

### ◇ 曾我大介(指揮者)

『虫けらには、ただの悦楽のみは与えられた

しかし、智天使ケルビムは神の御前に立つ(喜びが与えられた)』

曾我大介は、Und を「しかし」と訳し、「智天使ケルビムは神の御前に立つ」のあとにカッコ付きで「(喜びが与えられた)」と付け加えている。

### ◇ 提唱者不詳

『虫けらには快楽が与えられた

そしてケルビムは神の前に立っている』

「すべての創造物の生きる源が「喜び」である。まず愛と葡萄酒と友による人間の喜び、次いで「虫けら」の快楽、最後に天使ケルビムの喜びである。虫けら」は下等な生きも

の代表であり、「ケルビム」は、人間の上位の存在の代表である。「喜び」を求めるのは人間だけではない。人間より下位の虫けらのような存在も同じだ。彼らが得るのは「快楽」、つまり本能の充足による「喜び」だ。そして人間の上位にいる智天使ケルビムは「神の前に立っている」。神に直に接することで天上的な「喜び」を得ている。この節は、すべての創造物の生きる源が「喜び」であると述べている。まず愛と葡萄酒と友による人間の喜び、次いで「虫けら」の快楽、最後に天使ケルビムの喜びである。」

③ 人間は俗世の楽しみを超越して初めて神の世界に至るのだとする説

Wurmに注目し、これを「単なる虫」ではなく、明確に「人間より下位の忌み嫌うような存在、青虫、ミミズ、蛆虫などの虫のみならず下等な生きものの代表」と捉えるのである。その結果、「喜び」を求めるのは人間だけではなく人間より下位の虫けらのようなものも同じで、彼らが得るのは「快楽」、つまり本能の充足による「喜び」である。しかし、人間は俗世の楽しみを超越して神の世界に至るのだと考え「快楽は虫けらにくれてやり」と訳すのである。ただし、「ケルビムが神の前に立つ」という詩句との関係については説明していない。

訳出としては、「虫けらにも」「虫けらにすら」「虫けらにさえも」などの語を加えて訳されることが多い。

ただ、吉田真(明治学院大学教授)が指摘するように、原文にはこのような語はない。

(「そもそも原語には「虫けらにさえ」の「さえ」とか、「虫にも」の「も」に相当する単語がない。意識という名のもとに都合よく言葉を加えているという印象をどうしても捨てきれない。」(吉田真))

◇ 山之内克子(神戸市外国語大学准教授)

『快楽は虫けらにさえも与えられ  
天使ケルビムも神の御前に立つ』

ディーター・ヒルデブラントの著書の訳者・山之内は、「～にさえも」を加えて訳している。「ヒルデブラントは著書『第九』の中に、わざわざ「虫けらの名誉回復」と題した章を置いており、ヒルデブラントが、「この詩句は『偉大なる者もつまらぬ者も、やんごとない者も最も卑賤な者も、誰もが示す快楽への本能的追求』のことを語っている」と記しているのを踏まえている」という説である。

◇ 佐々木庸一(東京学芸大学名誉教授)

『快楽は蛆虫に与えられ、  
そして天使は神の前に立っている』

「蛆虫は肉体的快楽のみを知り、天使は天上の淨らかな喜びを知り、人間は蛆虫と天使との中間に位するという思想である」

佐々木は、「ケルビムにも喜びが与えられる」と言っている。

◇ 矢羽々崇(獨協大学教授)

『快楽は虫にも与えられ、  
ケルビムは神の前に立つ』

ここでは、「虫けら」ではなく、単に「虫」としている。

「虫という下等な存在には下等な肉体の快楽だけが与えられ、存在の上位に在る人間には高等な喜びが与えられる」

④ 「快楽を捨てることにより初めて神に至る快楽が与えられる」とする説

Wurmを「人間より下位の忌み嫌うような下等な生きものの代表」と考えるのは上記

③と同じである。ケルビムは、神への先導として現れると解釈している。

◇ 小宮正安(横浜国立大学教授)

『快樂などは蛆虫に与えてしまえ、

そうすればケルビムが見えてくる 神の御前に』

小宮は、Wollust (快樂) が「肉欲にも通じる享樂や放埒を伴った概念」であることを強調し、次のように述べている。

「これまで特権階級が貪って来た快樂等は蛆虫同様きわめて醜惡である。そのようなものは蛆虫がうごめく墓穴に捨ててしまえ。そうすれば何が起るか？ 神の御前にケルビムが見えてくるのである。つまり特権階級が貪るような快樂と袂を分かった時に、神の息吹が豊かに息づくエデンの園に近づくことができ、そこにいるケルビムの姿が見えてくる」というのである。

◇ 吉田真(明治学院大学教授)

『快樂は蛆虫に与えられた

すると智天使ケルブが神の御前に立ち現れる』

◇ 提唱者不詳

『邪惡な欲望など虫けらにくれてやった

すると、智天使ケルビムが神の御前に立つ』

「低級な欲望を投げ棄てると、智天使ケルビムが神へと先導してくれる」と解釈している。2行目の und を単純な並列ではなく、1行目の結果と見る。

### ◆ 第3節まとめ

第3節は「歡喜」がすべての生き物に如何に関わっているのかを述べている。

すべての生き物は歡喜に育てられ歡喜の道を歩んでいく。善人、悪人という人間界の括りに関係なくである。歡喜はわれわれに愛(接吻)と生きる糧(葡萄、かけがえのない友)を与えた。虫けらには、種の保存に欠かせない肉欲が最低限のものとして与えられた。

地上界では人間にとっても虫けらにとっても歡喜による恵みを享受しているが、天上界に目を向けると神の御前にはケルブが立ちほだかっている神のもとには容易に近づくことができない。

第3節は、「Vor Gott!」という憧れを込めた全合唱の *ff* による叫びを2回繰返して、この節の最後を締めくくっている。

そして、次節の第4節からは、場面を天上界に移して話が始ることになる。そこでは、地上界でのテーマであった「歡喜」から離れ、「神の存在」に対する我々人間の行動、心のありようについて語られることになる。

### (8) 第4節

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
durch des Himmels prächt'gen Plan,  
laufet, Brüder, eure Bahn,  
freudig, wie ein Held zum Siegen.

嬉々として、太陽や恒星たちが  
天空の壮大華麗な軌道の間を飛翔するように  
兄弟たちよ、胸躍らせて汝の道を疾走せよ  
勝利に向かって突き進む英雄のごとくに

### ■ 逐語解説

① Froh 「朗らかに、元気に、嬉しく」の意の副詞である。「嬉々として」と訳出した。

- ② wie は、この文では「～のように」という従属接続詞である。wie の後には文節が続く。

「wie seine Sonnen fliegen durch des Himmels prächt'gen Plan」の詩句において「カンマの位置」が混乱していて世に流布しているテキストには3種存在している。一つ目は「カンマの位置」が Sonnen(太陽たち)の後ろ、二つ目は動詞 fliegen(飛ぶ)の後ろ、三つ目はカンマなしというものである。

まず、一つ目の Sonnen の後ろにカンマがある場合であるが、この場合、wie seine Sonnen, 「太陽たちのように」で切れるので、カンマのすぐ後ろに位置する動詞 fliegen の主語が存在しないということが起きてしまう。百歩譲って fliegen の語形をそのまま使う命令形と解釈して「あなたたちよ、太陽たちのように天空の軌道の間を飛翔せよ」とするならば、その場合は、fliegen の後に主語の Sie(「あなたたち」2人称敬称複数主格)が必ず必要なので(文法上この Sie の省略は許されない)、「, fliegen Sie durch des Himmels prächt'gen Plan」となっていないなければならない。よって Sie(「あなたたち」2人称敬称複数)への命令ととるのは無理。

或いは、主語なしが許される場合として、fliegen を Ihr(「あなたたち」2人称複数)に対する接続法 I 式による要求話法「～しなさい」とする場合が考えられるが、この場合、「fliegen」ではなく「flieget」という語形にせねばならず(動詞の語幹 flieg + et)、「, flieget durch des Himmels prächt'gen Plan」とならなければならない。以上、いずれにせよ Sonnen の後ろにカンマを打つのは間違っていると考えられる。

二つ目の fliegen の後ろにカンマがある場合、「天空の軌道の間を飛翔する」という一つのまとまりとして意味があるのに fliegen の後ろにカンマを入れると durch 以下と分断することになりカンマを入れることは意味をなさない。

よって結論として「カンマなし」というのが最も自然で正解だと思う。

- ③ seine Sonnen は、「seine 彼の」であるが「創造主が作った」という意味であろう。複数形であるので創造主が宇宙に造形した太陽たちということになるだろう。しかし、太陽は通常唯一の物として定冠詞付き単数で die Sonne という形で使われるはずであるから、やはりここでは銀河系に存在する多くの恒星という意味も含んでいると考えるべきであろう。

- ④ durch des Himmels prächt'gen Plan: 「天空の壮大華麗な軌道の間を」

durch(～の間を)は前置詞で後ろに4格の名詞(ここでは Plan)をとる(4格支配)。

des Himmels「天空の」は Himmel という名詞の2格による修飾用法で Plan を修飾している。prächt'gen=prächtigen は形容詞 prächtig「華麗な」の4格で Plan(「Plan」は durch の4格支配により4格をとっている)にかかる。des Himmels prächt'gen Plan は直訳すると「天空の華麗な計画」となる。「計画」というのは「創造主が作った計画=定められた道筋=軌道」と解釈して「天空の軌道の間を」と訳出した。

- ⑤ laufet「走れ」は、原形は laufen であるが、ここでの語形が「laufet」(動詞の語幹 lauf + et)となっていることからすると Ihr(「あなたたち」2人称複数)に対する接続法 I 式による要求話法「～しなさい」であると考えられる。もし、通常の数2人称への命令形なら「lauft」(語幹 lauf + t)となるはずであるがそうになっていないので、単純な命令形ではない。

laufen が導くのは4格の名詞であるので eure Bahn(「道」女性名詞)は4格をとっている。eure は、所有形容詞「君たちの euer」の変化形 euere(4格)が本来の形であるが、普通は3文字目の e が略されて「eure」となったものである。

Brüder はここでは複数形であり、「兄弟」という一般的概念を表しているので無冠詞。

freudig は、本来「喜ばしい、嬉しげな」という形容詞であるが、ここでは「喜んで」と副詞として用いられている。

⑥ wie ein Held zum Siegen: 「勝利に向かって突き進む英雄のごとくに」

世にある翻訳として、「勝利(Siegen)に向かって突き進む英雄(Held)のように」(名詞節)とする訳と「英雄が勝利に向かって突き進むように」(文節)とする訳の2種がある。後者(つまり文節)とすると「突き進む」という意味の動詞が省略されていることになり、動詞が存在せず文法的に無理。よって前者のように「勝利に向かう(zum) 英雄」と名詞節として取るのが自然。因みに、wieの後ろには名詞をとる場合と文をとる場合の両方があるが、ここでは名詞をとっている。

直訳すると「勝利に向かう英雄のごとくに」であるが「勝利に向かって突き進む英雄のごとくに」とした。

◆ 第4節まとめ

そもそもシラーの詩は全部で9節からなっているが、1つの節は8行にわたる独唱(Vers)とそれに続く合唱による4行(Chor)という構成でなっている。1人が独唱で歌い出したら続いて皆で呼応して歌い出すという当時流行していた形式のようであるが、Versによる8行で「歓喜」について述べ、Chorによる4行では天上界について述べている(後に削除した第9節を除く)。

ベートーベンが、原詩の第1節～第3節のChor部分4行をどのように扱っているかを見てみると、原詩第1節Chor部分4行は「Seid umschlungen, Millionen!」で始まる4行で第九では第5節前半に使われ、第2節Chor部分4行は第九では使われていない。第3節Chor部分4行は「Ihr stürzt nieder, Millionen?」で始まる4行で第九では第5節後半に使われている。そして、原詩の第4節Chor部分4行が、この「Froh, wie seine Sonnen fliegen」で始まる4行で、第九の第4節として使われている。即ち、分かりやすく言うと、ベートーベンは、天上界について述べている原詩のChor部分4行は第九の後半部にまとめて持って来ている。

このようにベートーベンは、原詩での並びから離れて自分の述べたい内容に添うように取捨選択し並びも変えている。

この第4節は、第1節～第3節とは場面が変わって天上界の話になっている。これは歓喜について語って来た地上界を離れ天上界に目を移した、つまり第4節において地上界という第一幕から天上界という第二幕に場面転換をしたということであろう。第5節も天上界の話が続いている。

(9) 第5節 前半

Seid umschlungen, Millionen!	抱き合おう、幾百万の人びとよ!
diesen Kuß der ganzen Welt!	全世界の人びとと口づけを交わしあおう!
Brüder, über'm Sternenzelt	兄弟たちよ、遙か星空の彼方には
muß ein lieber Vater wohnen.	愛する父が必ず住み給うに違いない

■ 逐語解説

① Seid umschlungen, 「抱き合おう」と訳出したが、以下の理由による。

Seid は、sein の親称 2 人称複数 ihr(君たちは)に対する命令形でありまた umschlungen という過去分詞(原形は umschlingen)が用いられているので、文法的には「君たちは抱きしめられなさい」という複数人に対する状態受動態の命令文である。ただドイツ語における受動態では主体が示されないことはよくあることなので、主体が von～という形で示されていないのも不思議ではない。ここは主体は「君たちの周りにいる誰か」と考えるべきところである。しかし、敢えて主体は示すのではなく「君たち、誰でもいいから君たちの周りにいる誰かに抱きしめられなさい!!」というのが本当の意味だと思う。それこそまさに人類愛の最たるものでありこの詩の真髄ともいうべきものであろう。即ち「我々は互いに抱き合おう」と言いたいのであり、翻訳としては「抱き合おう」としてもなんの不合理もない。そのあとに「全世界の人び

とと口づけを交わしあおう!」という詩句が続いていることから見ても、抱き合う主体は全世界の人々を構成する個々人なのである。

尤も、この詩はフランス革命直前の1785年の作であり、“我々が抱き合う”という表現を使うと、ポーマルシェの戯曲「フィガロの結婚」のように、検閲に引っかかる恐れがあったかもしれないとの説(神崎)もある。

## ★ 論考

主体に関しては異説も多い。いくつかを下記する。

### i. 小塩節 (中央大学教授 ドイツ文学者『NHK 基礎ドイツ語講座』講師)

小塩は「数百万の人々よ 我が抱擁を受けよ」と訳すべきとし、以下のように説明している。

「これは、大衆を前にした人が熱弁をふるって “Seid gegrüßt” 「ようこそ、わが挨拶を受けよ」というのと同じ構造である。

ところが、フランスのベートーベン崇拜者ロマン・ロランが *embrarez-vous* 「抱き合え」と仏訳したのを受けて、彼のベートーベン解釈の絶大な影響を受けた日本では、いつも「抱き合え」と訳すことになっている。明かな誤訳である。

皮肉なことに、この誤訳の方が日本的気持には受け入れられやすい。集団の「和」を重んずる日本人は、みんなで仲良くやっぺいこうという呼びかけは、素直に聞ける。しかし、両手を開いて「我が抱擁を受けよ」、「俺が君たち皆を抱くぞ」と全人類を叱咤激励するような発想は馴染まない。」

また、次のようにも述べている。

「我が抱擁を受けよ」というところは、「私」の強烈な感情が噴出するように全世界の人々に向けて語られたところです。それまでは理想郷での出来事のような描写だったのが、非常に個人的になったのです。人々よお互い仲良くなれ、兄弟になれと勧めているのだというロマン・ロランの解釈もあります。それは彼の自己流解釈でして、そういう解釈は明白な理由でダメなのです。私の気持を強く表現する決まった形があるわけで、決して *Umschling euch!* ではないのです。Seid umschlungen *von mir!* なのです。次の行の [Ich gabe] diesen Kuß der ganzen Welt! は世界中の人々の(2格と考えて)熱い口づけを褒め称える、ではなくて、「私が口づけを与える」の意志を表明しているのです。だから1行目も2行目も「私」の意志、感情に間違いのないのです。」

### ・中元コメント

文法的には小塩の言うとおりであるが、この小塩の説に言う *von mir* の「mir(私)」とは、具体的には誰を指すのだろうかという素直な疑問がある。単なる市井のひとりの市民のことなのか、それとも創造主、神なのか。

中元としては、以下のように小塩の説を解釈する。

小塩の言う「私」は「特定されない市井の一人である私」と考えればよいのではないか。そうすると全世界の人々皆がそれぞれ「私に抱きしめられなさい」と百万人の人達に向けて声を掛け合うことになり、結局「皆で抱き合おう」ということに帰着する。Seid umschlungen のあとに *Millionen!* という呼びかけが置かれている意味がこれですっきりする。つまり「抱き合おう、幾百万の人びとよ!」という訳になる。

### ii. 前田昭雄(音楽学者、指揮者、ウィーン大学名誉教授。『ベートーヴェン全集』の編者)

前田昭雄は、自身が編集した『ベートーヴェン全集』その第3巻(1997)で「抱き合おう」と訳しているが、同第9巻(1999)で、この訳について釈明している。ひょっとしたら上記小塩の説を知って釈明すべきと考えたのかもしれない。

以下のように説明している。

「この抱擁 Seid umschlungen はどう訳したら良いのだろう。この場合は受け身を伴って「君たちよ、抱かれてあれ」ということになる。変な日本語だから砕きたい。

シューベルトの歌曲にもあるように「Sei mir gegrüßt(直訳:挨拶されてあれ)」というのが實際上「挨拶を送ります」であるように、形は受動でも意味上は能動態で、ただ古典的な格調のニュアンスを持った言い回しになっているのだ。そうすると私達の例も「我が抱擁を受けたまえ」となってくる。

しかし、「百万人の抱擁」は独唱で歌われることはなく、いつも合唱で歌われる。ということはその意味も「われ」が百万人ではないにしても合唱の数百人ではあるのだから、その唱和は事実上「われらは互いに抱擁する」という圧倒的なコールを成立させることになる。」

#### ・中元コメント

前田は、文法的には「わが抱擁を受けたまえ」が正しいかもしれないが、この箇所は「合唱」が歌う歌詞なのであるから「われらは互いに抱擁する」としても誤りとは言えないとしている。シラーの詩を文学として翻訳している訳ではなく、音楽の歌詞として翻訳しているのであるから「抱き合おう」という訳で良いと主張している。

#### iii. 吉田真(明治学院大学教授)

「私たちに抱かれよ」と解釈するものである。

「抱擁を受けよ」について吉田は次のように説明している。

「この表現は Sei mir gegrüßt!(わが挨拶を受けよ)や Sei mir geküßt!(わが口づけを受けよ)などと同じく、受動態の命令文である。ここ(=シラーの詩句)では3格の mir(私に)はないが、相手が2人称複数であり、合唱部の詩句であることから実質的には3格の uns(私たちに)があるのと同じで、すると「我らの抱擁を受けよ」となるだろう。「抱き合え」という訳は、やや逸脱があるのではないだろうか」

#### ・中元コメント

この吉田の説明では、「Sei mir gegrüßt」の mir は利害関係の3格(私のために)だろうか。「(私のために)挨拶されてあれ」となる。この類推から「Seid uns umschlungen」は「(私たちのために)抱かれてあれ」は「我らの抱擁を受けよ」となると言いたいのであろうが、「(私たちのために)抱かれてあれ」イコール「我らの抱擁を受けよ」というのは理解しにくい。

#### iv. 小宮正安(横浜国立大学教授)

「神に抱かれよ」と解釈するものである。

「人間が自らの意思で抱き合うのではなく、人間を超えた大きな存在に抱かれるということになる。」と小宮は説明している。「人間を超えた大きな存在=神」と考え、「Seid umschlungen von Gott! (=神によって抱かれよ)」と解釈している。

- ★ 文法的に「状態受動(Zustandspassiv)」ではなく「状態再帰(Zustandsreflexiv)」とする見方もあるようであるが、「状態再帰(Zustandsreflexiv)」というのは文法論として理解が難しいので殊更このように考えなくても、状態受動と考えて十分であるしそれが自然であろう。

- ② diesen Kuß der ganzen Welt!, 直訳すると「この口づけを全世界に!」  
 diesen Kuß(男性名詞)は4格で「この口づけを」である。「私達一人一人」というところに焦点を合わせているので指示代名詞である diesen を使っているのであろう。der ganzen Welt(女性名詞)は3格で、訳すと「すべての世界に」。ganzen は Welt(女性名詞)の3格を受けて ganz が3格変化したものである。主役は「私達一人一人」であるので、「全世界の人びとと口づけを交わしあおう!」と訳出した。名詞だけを置いた強調表現である。
- ③ Brüder, über'm Sternenzelt : 「兄弟たちよ、遙か星空の彼方には」  
 über'm =über dem Sternenzelt(=Stern(星)+zelt(幕)で「星による天幕」即ち「星空」)
- ④ ein lieber Vater の lieb (敬愛なる)は、「父=神」に向けられた敬愛を示す形容詞である。  
 手紙などで使われる”Lieber Vater (親愛なる父へ)”というのと同じ。男性名詞 Vater にかかる付加語的用法であるので lieber と語尾変化している。lieb の形容詞比較級と見て「もっと敬愛なる」とする訳も見受けられるが間違い。比較級にするのなら lieber に比較級の語尾変化を付けて lieberer としなければならない。  
 Vater は「神」という訳語も認められてはいるが(博友社ドイツ語辞書, 木村・相良)、星空の彼方にいる神に向けたものであるので親愛の情をこめて「Vater」という語を用いたのであろう。よってその意を汲んで「父」と訳出した。また、ein Vater と不定冠詞をつけていることから「神」と直接意識されるのをあえて避けているのであろう。  
 このくだりについて小塩節(前出)は、次のように述べている。  
 「星空の上に「父」がいる、住んでいるというのは、カント的発想ですが、まぎれもなくキリスト教的思考です。 lieber Vater という人格的關係はギリシアの神に対してはありえませんが、これから紹介するから不定冠詞 ein...なのです。」
- ⑤ muß ein lieber Vater wohnen : 「愛する父が必ず住み給うに違いない」  
 mußは「～に違いない」という助動詞 müssen が ein lieber Vater という3人称単数主語により変化したもの。müssen の「～に違いない」というのは「確信」に近いニュアンスである。更に文頭に持って来て強調するという構文になっている。「必ず」という語を加えて訳出した。

## ★ 論考

1. 第九のメインテーマを合唱が高らかに歌いあげる最初のクライマックス(543-590小節)では、Freude, schöner Götterfunken, から始まる第1節を歌わせており、さらに Deine Zauber からの後半部を繰り返させている。ベートーベンはこの第1節の詩句は第九のテーマに相応しいと考えたのであろう。  
 ところが、この圧倒的な盛り上がり(590小節)で曲が終るのかと思いきや、このあと第4楽章に入って初めていきなり *ff* のトロンボーン、さらにチェロ・バスの低弦及び男声合唱という低音のみによる力強い音楽を奏でさせている。その音楽というのが、ここ「Seid umschlungen, Millionen! diesen Kuß der ganzen Welt! (抱き合おう、幾百万の人びとよ! 全世界の人びとと口づけを交わしあおう!)」なのである。ベートーベン「Alle Menschen werden Brüder, wo dein sanfter Flügel weilt. (汝の柔らかき翼のもとですべての人びとは兄弟となる)」といかにもこれが最高潮だと言わんばかりに高らかに全合唱、全楽器総出で歌わせた直後、この渋く重みのある「Seid umschlungen, ~」を持って来ているのである。
2. メインテーマのお祭りのようなオーケストラ・合唱による大合奏が *ff* のまま断ち切れ、フェルマータの終止による静寂を置いて、天使が持つ楽器といわれるトロンボーンにこの曲初めての音を *ff* というインパクトをもって語り始めさせ、低音による重厚な音楽を荘厳に奏でさ

せるという、この強烈な対比。意識の大きな転換を暗示しているのではないかと思えて仕方がない。

「歓喜の力によって全ての人々が兄弟となる」ということもさることながら、「神の存在への実感、近づきというものは、幾百万の人びとが抱き合い、口づけを交わしあうことによりなされ得るものなのだ!」ということもベートーベンに合わせて強く言いたかったのではないだろうか。

3. シラーの原詩では、確かにベートーベンが採用したこの順のとおり並んでいる。

即ち、原詩第1節において「wo dein sanfter Flügel weilt.」の直後に「Seid umschlungen, Millionen! diesen Kuß der ganzen Welt!」で始まるこの第4節前半の4行が続いている。

#### (10) 第5節 後半

Ihr stürzt nieder, Millionen?	ひざまづいているか、幾百万の人びとよ?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?	世界よ、汝は創造主の存在に気付いたか?
Such' ihn über'm Sternenzelt!	星空の遥か彼方に主を尋ねてみるがいい!
Über Sternen muß er wohnen.	そこには必ずや主がおわしますに違いない

#### ■ 逐語解説

① Ihr stürzt nieder, Millionen? : 「ひざまづいているか、幾百万の人びとよ」

stürzt nieder は、niederstürzen (「激しく倒れる(落下する)」)という分離動詞で、Ihr(君たちは)を主語とする直説法現在複数2人称形。主語のすぐ後ろに動詞が来ているので分離して stürzt nieder となっている。ここで niederknien (ひざまづく)ではなく、niederstürzen (激しく崩れ落ちる)が使われていることからすると、ただ単に「ひざまづく」のではなく、神の存在を信じて畏怖の念から魂までも奪われ膝から崩れ落ちるというような状況を暗示しているのであろう。

Millionen?と疑問符「?」がついているが、語順は平叙文である。疑問と言うより強い問いかけと解釈して「~か」と訳出した。Millionen は文字どおり「幾百万」でよいであろう。

② Ahnest du den Schöpfer, Welt? : 「世界よ、汝は創造主の存在に気付いたか?」

1行目では ihr (お前たち)と複数形であるので「幾百万の人びと」に呼びかけているのに対し、この2行目は du (お前)と単数である。よってこの du は「世界」に対して問いかけていると考えられる。Welt は「世代」という意味も含んでいるので、意味的には「世界の人々」を一括りにしたということであろう。

・ Ahnest : 「予感する」「おぼろげに感じる」

ahnen は「予感する」という意味の動詞であるが、主語は du、即ち、単数2人称であるので本来は ahnest ではなく ahnst となるはずである。なぜこうなっているのかは不明である。

#### ★ 論考

シラーの原詩第3節では「Ahndest du den Schöpfer, Welt? 」となっている。即ち、ahnen ではなく、ahnen の古語・雅語である ahnden が使われている(意味は同じ)。ベートーベンが作曲時に ahnen に変えたのであろうが、それにしてもその際正しいドイツ語の ahnst ではなく ahnest にしたのは何故だろうか。原詩の ahnden の単数2人称変化である ahndest が意識下にあり、さらにこの箇所音楽即ち音符に言葉を当てはめるには、母音が2つ必要になることから1母音である ahnst ではなく2母音の ahnest を使いたかったのかもしれない。ただしこれはあくまでも中元の憶測である。

- den Schöpfer, 「創造主, 神」の意の男性名詞 4 格である。ein Vater とは違い定冠詞 der を付けているので、ここでは明確に「創造主、神」を意識している。
  - Ahnest du den Schöpfer? は直訳すると「君は創造主を予感するか?」
- ③ Such' ihn über'm Sternenzelt! : 「星空の遥か彼方に主を尋ねてみるがいい」  
直訳すると「星空の彼方に主を捜してみなさい」である。  
suche の e が略されて such' となっているので、その語尾から単数 2 人称 du (君は) に対する命令形であることが分かる。suchen は「捜す・捜し求める」の意。命令法ではあるが、ここでは「命令」というよりも「勧め」というニュアンスと解釈し「尋ねてみるがいい」と訳出した。ihn は「彼を」であるので、der Schöpfer 「創造主, 神」を指している。
- ④ Über Sternen muß er wohnen : 「そこには必ずや主がおわしますに違いない」  
muß が用いられているので「必ず～にちがいない」。「確信」に近いニュアンスである。

#### ◆ 第 5 節まとめ

1. 以下は、第 3 節の「der Cherub steht vor Gott」の解釈のところで述べたことであるが、再掲する。

地上界においては、人間には接吻、葡萄、友という歓喜が与えられ、虫には肉欲が与えられ、それぞれ喜びを感じることができていたが、一方天上界に目を移すとそうは行かない。天上界では、神はアダムとイヴを追放した後、エデンの園の東には生命の木への道を守るべくケルブが立ちはだかっているため、人間は「エデンの園」に入ることはできず、神の存在を実感することはできない。

ではこの天上界での現実を見たとき、我々人間が神の存在に迫るにはどうすればよいのか。その答えが第 5 節にあるのではないか。第 5 節では次のように語っている。

「幾百万の人びとよ! 抱き合おう、全世界の人びとと口づけを交わしあおう、そうすれば、愛する父は遥か星空の彼方にいるにちがいない(と示唆を受けられるであろう)。また、ひざまづけば、創造主の存在に気付く、星空の遥か彼方に必ずや主の存在を予感するにちがいない。」

幾百万の人びとが、抱き合い、全世界の人びとと口づけを交わしあうこと、そしてひざまづくという畏怖の念、これこそが我々人間が神の存在を実感するための唯一の手段であるということをベートーベンが訴えたいのではないだろうか。

2. 第 5 節 前半で、先ず、兄弟たちよ(Brüder)と語りかけ、次に幾百万の人びと(Millionen)に呼びかけ、最後に世界(Welt)に対し主を尋ねてみなさいと対象が次第に広がっていく。

その内容も、最初は「遥か星空の彼方には愛する父が必ず住み給うに違いない」と語りかけ示唆を与えるだけのものではあったが、次には「父(Vater)」は「創造主(Schöpfer)」であると言い換えられ、後半では、ひざまづいているかと敬虔な気持ちになるよう呼びかけ、そうして創造主の存在に気付いたなら星空の遥か彼方に創造主を尋ねてみるよう説いている。

そうすることによる結果、創造主に会えるかもしれない、神の存在を実感できる世界に近付くことができるかもしれないのだと結んでいる。

## 4. あとがき

- (1) 今回 BKO での第九演奏にあたりこの詩を翻訳する機会を得て、文法的事項を含め、文言解釈を徹底的に見直してみた。今回提示した翻訳においても間違いが見つかったように、改めて「翻訳ノート」を見直しまとめ直してみると、新しい発見もあった。

今回は主に「詩の解釈」が主眼であったが、欲を言えば、この詩とベートーベンの音楽、ベートーベンの思想・意図との関連にまでもっと深く考察し言及したかったが出来なかった。

- (2) 原詩は 1785(一説には 1786)年にシラー自らが刊行した「ターリア」という雑誌の第 2 号に発表されたもので、全 9 節からなる「An die Freude(歓喜に寄せて)」という頌歌である。頌歌とは、神の栄光や人の功績などを褒め称える歌をいうが、この詩は 1 つの節が 8 行にわたる独唱部分 (Vers)とそれに続く合唱による 4 行(Chor)とからなっている。当時酒場などで集まった仲間たちのうち 1 人が独唱で歌い出したら続いて皆で呼応して歌い出すという、そういうスタイルの詩のようである。

ベートーベンが第九に用いたのは、全 9 節という長大な原詩のうちの第 1 節～第 3 節の 3 節と第 4 節の一部のみであり、しかも第九での用い方は原詩の並び順どおりではない。ベートーベンはこの詩を借りて独自のストーリー性を持たせていることが見て取れる。

ベートーベンが、このシラーの詩を通じてどのようなことを訴えたかったのだろうか。

これについては、各節の「まとめ」や「論考」のところで多少触れてはきたが、ベートーベンが語りたかったことをこの場で総括して述べるにはまだまだ研究は足らず、もう少し今後の愉しみとするところでもある。

今後更にこの詩を追いかけ、汲めども尽きぬ第九の魅力に迫っていきたいと思っている。

- (3) 以上、中元による詩句の解釈、訳出を説明してきましたが、お読み下さったことに深く感謝する次第です。この小文の最初にも書きましたが、浅学ゆえの間違いや独善的なところもあるかもしれません。ご容赦頂ければ幸いです。

最後に、今回の翻訳を強く勧めて下さり、何かとご意見を下さった三ヶ尻勉氏に深く感謝の意を捧げたいと思います。

以上

## 【改訂新訳】

O Freunde, nicht diese Töne!  
Sondern laßt uns angenehmere  
anstimmen, und freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium  
Wir betreten feuertrunken,  
Himmlische, dein Heiligtum!  
Deine Zauber binden wieder,  
was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,  
eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
mische seinen Jubel ein!  
Ja, wer auch nur eine Seele  
sein nennt auf dem Erdenrund!

Und wer's nie gekonnt, der stehle  
weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen  
an den Brüsten der Natur;  
alle Guten, alle Bösen  
folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
einen Freund, geprüft im Tod;  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
durch des Himmels prächt'gen Plan,  
laufet, Brüder, eure Bahn,  
freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen!  
diesen Kuß der ganzen Welt!  
Brüder, über'm Sternenzelt  
muß ein lieber Vater wohnen.  
Ihr stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such' ihn über'm Sternenzelt!  
Über Sternen muß er wohnen.

おお友よ、このような音楽ではないのだ！  
もっと快い調べを歌い始めようではないか  
そうだ、もっと喜びに満ちた調べをだ

喜びよ、美しき神々の火花よ  
エリュシオン(永遠の楽土) から来た娘よ  
われらは神々の火花の炎に酔いしれて  
天なるものよ、汝の聖なる世界に足を踏み入れる！  
汝の持つ魔力はこの世の慣習が厳しくも切り離れたものを  
再び結び合わせる  
汝の柔らかき翼のもとで  
すべての人びとは兄弟となる

一人の友を真の友とするという  
大きな成功を収めた者よ  
優しき妻を得ることのできた者よ  
歓喜の叫びを共に上げよ！  
そうだ、地球上に存在する魂のうち、  
たった一つでもいいから自分のものであると  
そう主張できる者もまた歓声を呼応せよ！  
これらのどれ一つとして成しえなかった者よ  
涙を流してこの団結の輪からそっと立ち去るがよい！

全ての生きとし生けるものは  
自然の乳房から歓喜を飲み  
全ての善人も全ての悪人も  
歓喜の薔薇の小径をたどって行く  
歓喜はわれわれに接吻と葡萄を与え  
さらに死の試練をもものともしない一人の友を与えた  
官能の悦びは虫けらにも与えられたが、一方  
神の御前には智天使ケルブが立ちほだかっている

嬉々として、太陽や恒星たちが  
天空の壮大華麗な軌道の間を飛翔するように  
兄弟たちよ、胸躍らせて汝の道を疾走せよ  
勝利に向かって突き進む英雄のごとくに

抱き合おう、幾百万の人びとよ！  
全世界の人びとと口づけを交わしあおう！  
兄弟たちよ、遙か星空の彼方には  
愛する父が必ず住み給うに違いない  
ひざまづいているか、幾百万の人びとよ？  
世界よ、汝は創造主の存在に気付いたか？  
星空の遙か彼方に主を尋ねてみるがいい！  
そこには必ずや主がおわしますに違いない